

# 京都西山断層帯と竹の子の産地

都の置かれた京都には城壁がない。それは世界的に見て珍しいことである。京阪神奈良の都市が活断層性の盆地や平野にあるということに由来する。

プレート運動で大地がずれ、隆起した山から浸食されて土砂が流出し、扇状地と堆積層を形成した。そこに大量の水が溜まり、都市が形成された。地下水を元に茶の湯が生まれ和菓子や酒が造られた。

京都盆地を形成した活断層帯の中で京都西山断層帯に沿って歩いてみたい。京都西山活断層群は丹波山地が京都盆地の上のし上がるように動く活断層群で、上下のずれを起すから、地表の地図でたどると曲がりくねったり分岐したりして複雑である。京都西山断層帯の南東半部に

は榎原断層と光明寺断層などがある。

榎原断層を嵐山から都市圏活断層図によってたどる。断層線は渡月橋を南へ渡って突き当たった山裾から南南東へ向かい、松尾大社の本殿の背後の崖を通り、ほぼ南へ向かって西芳寺への入口から南へ、地藏院、浄住寺を通過して住宅地を抜け、京都大学桂キャンパスのある丘陵の東のふもとに沿って南へ、榎原廃寺跡、淳和天皇火葬塚、桓武天皇皇后陵の東から南東方向へ、向日市の競輪場に達する。

光明寺断層は、大原野の灰方、上羽から光明寺の入口、京都西山短大の東の山裾、西山公園を抜けて長岡天満宮のある山ろくを通過して南東へ向かい、恵解山古墳まで延びる。西山の断層系の崖を新幹線などが

ら見ると、活断層の運動で切り取られた尾根の末端面が三角形になっている。これを三角末端面と呼び、活断層である証拠の一つになる。

大地震の繰り返しで破碎された山のふもとは崩れやすい。人々は竹を植えて災害を防いだ。活断層が盆地と山地の境にあるおかげで、おいしい竹の子が京都盆地の名産となった。明治の陸地測量部の地図を見ると、竹林の列と活断層がみごとに対応しているのがわかる。

西山では竹やぶに赤土を入れて手入れをする。赤土が酸化を防いで白いやわらかな竹の子が育つ。赤土がもり上がってきたら顔を出さないよう

ちに竹の子を掘り出す。

竹の子は同じ根の竹のクローンである。節の数は根のつながる竹で同じになる。竹の子の皮の一枚につき、節が一つできるから、竹の子の皮の数と横の竹の節の数が同じということになる。何十年に一度かは、竹は花が咲いて枯れて遺伝子を交換する。

竹の子の栄養価は高い。三月から五月にかけてこの辺りでは、朝掘りの竹の子を使って、木の芽和えや薄切りにした竹の子の刺身、焼竹などさまざまな竹の子料理を味わうことができる。自前で竹やぶを持つている料亭などでは、質を保つためにやぶの手入れを怠ることがない。



〈おいけ かずお〉  
京都造形芸術大学学長。1940年東京都生まれ、高知育ち。京都大学理学部卒。京都大学総長などを経て、2013年4月から現職。主な著書は「新版活動期に入った地震列島」、「日本列島の巨大地震」、「変動帯の文化」、「四季の地球科学」、「2038年南海トラフの巨大地震」など。

松尾橋近くの桂川沿いから西山方面を望む

